

2020年(令和2年)度
海外帰国生徒特別入学試験問題[A日程]
小論文

2019年10月20日 実施

【解答上の注意】 答案は別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》

読むという行為によって読者が意味をつくり出すという発想、読者を芸術の消費者としてではなく、意味の生産者として位置づけるという発想は、初期には哲学者ローマン・インガルデンによって、のちに1960年代から70年代にかけて受容理論を背景としてフランス文学研究者であるハンス・ロベルト・ヤウスと英文学研究者のヴォルフガング・イーザーらの著作を通して広く一般に浸透していく。ヤウスの論は読者に重きを置いた受容美学と呼ばれ、イーザーの論はテキストの方に力点を置いた作用美学と呼ばれるが、ヤウス自身が述べたように双方が受容理論の補完関係にあると考えればわかりやすい。

美術の方に目を向けると、60年代初頭には美術史家の木村重信が「芸術作品は独善的な芸術家個人の支配を脱し、観者の自由な意識をまっけて初めて意味を獲得するものであり、その意味でそれは、作者から観者へという一方通行の形で成立するのではなく、両者が真に自由に相互通行するための仲介者である」と述べている。

木村の論は、ダダやシュルレアリストによるオブジェの登場によって20世紀における美術作品の意味が大きく変わり、観衆と作家・作品との関係も変わったことを前提にしたものだ。木村はこの論文の中で、オブジェは「見る者の自由な意識を前提としなければ成立しない」と断じた。そしてサルトルが『文学とは何か』の中で述べた「創造は読者の中でしか完成しない」という言明を引用しながら、「芸術作品において作者は或特定の^{ある}意味を観者に告げるのではない。芸術作品は……(略)……観者の自由な意識をまっけて初めて意味を獲得する」とオブジェ以後の美術鑑賞の意味について言及したのである。

観者が作品に意味を与えるという考え方や作品は意味生成の仲介者という考え方は、受容理論やテキスト論の成立と浸透を睨んでも時期的に極めて先進的な考え方だったといえる。

そのおよそ10年後、美術評論家の藤枝晃雄が「今日、……(略)……芸術のあらゆる領域においていわれているのは、作者→作品ではなく、作品→観者という方向への要請である」といい、「見るものの役割の増大は、作者の言葉への信用という潜在的な芸術家への複^{コンプレックス}合からの、そして芸術からの解放である」と示したように、70年代初期にはすでに鑑賞者中心的な鑑賞理念が「芸術のあらゆる領域において」要請される状況があったということである。

(上野行一著『風神雷神はなぜ笑っているのか』より)

《問題》

課題文を読んで、以下の指示に従って答えなさい。

- (1) 受容美学と作用美学の双方が受容理論の補完関係にあるとはどのようなことかを200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。
- (2) 次の問いへの答えを、300字以上500字以内で解答欄②に書きなさい。

問：「創造は読者の中でしか完成しない」とすれば、どのような読者が創造を完成しうるか。
具体的な根拠を示しながら自分の考えを論述せよ。